

平成 29 年度
しゅりとうのくらきゅうすいろ
首里当蔵旧水路・首里城公園中城御殿跡
なかぐすくうどうんあと
発掘調査現地説明会



首里当蔵旧水路



首里城公園中城御殿跡



調査区全景

平成 29 (2017) 年 12 月 23 日 (土)
沖縄県立埋蔵文化財センター

しゅりとうのくらきゅうすいろ 首里当蔵旧水路

1. 調査の経緯

沖縄県立埋蔵文化財センターでは、平成 29 年 12 月 4 日より平成 30 年 1 月末の予定で、龍潭沿いに位置する首里当蔵旧水路の発掘調査を実施しております。本調査は、沖縄県土木建築部による龍潭線(県道 29 号線)街路整備事業の一環である龍潭付近の擁壁工事に伴う記録保存のためです。

今回の調査区は、龍潭沿いで中城御殿跡の前面に位置しておりますが、今回確認された首里当蔵旧水路は、那覇市教育委員会の調査により県道沿いに現在の首里交番付近まで、部分的に確認されております(図 1)。



図 1 首里当蔵旧水路と調査区の位置

2. 首里当蔵旧水路周辺の歴史環境

さて、今回の調査区に近接する龍潭ですが、琉球統一を果たしたとされる尚巴志が 1427 年に、明からの冊封使のすすめに従って、国相の倭機が作庭した人工池であり、魚小堀とも呼ばれます。明の首都であった北京をはじめ、中国各地に龍潭池があるそうです。この龍潭は 1955 年に沖縄県指定史跡となっております。

この龍潭の北端である現在の県道には、戦前までには世持橋が架かっており、今回確認された水路はこの橋の下に流れ込んでいたと考えられます。この橋は、1661 年に第一尚氏の菩提寺とされる慈恩寺跡より移築したものと言われています(図 2)。

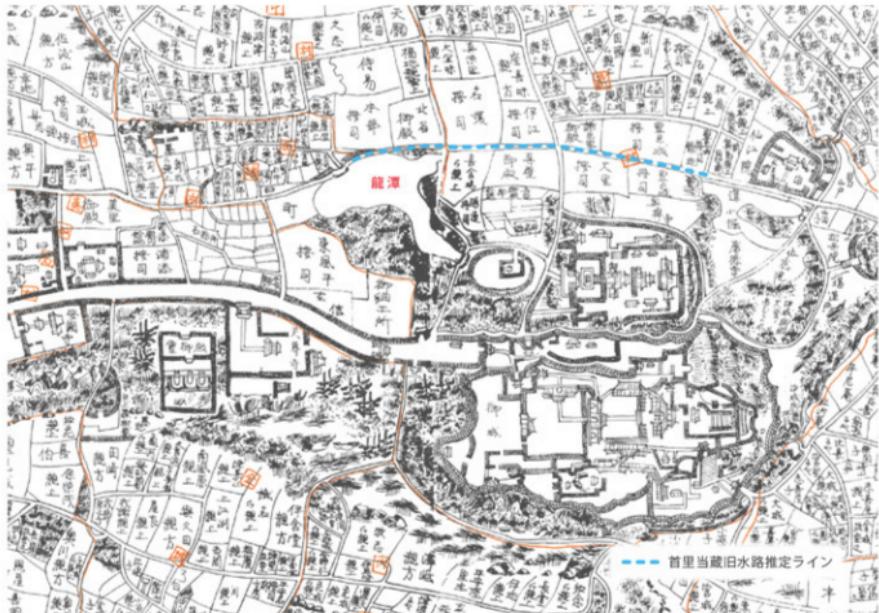


図2 首里古地図にみる当蔵旧水路周辺

また、本水路は那覇市教育委員会の調査では現在の首里交番まで続いていたものと考えられており、その全長は約400mはあったものと思われます。この一帯は先述した慈恩寺と蓮小堀という池があり、本水路はこの池が基点であったものと考えられます。沖縄戦後、この周辺は荒廃しましたが、2000年に首里城は世界遺産となり、環境に配慮した街づくりが行なわれているところです（図3）。

3. 調査の成果

今回の調査で確認された水路遺構は、調査区内の長さは60m、幅70cm、深さ60cmを測り、両側には長さ20～60cmの琉球石灰岩で3～4段積まれています。床面には、20～30cmほどの石を石畳のように敷き詰めています（図4～6）。龍潭側に設定したサブトレンチでは、幅80cmほどの両面積みの石垣であったことも分かりました（図7）。また龍潭側の上段部分には、機械できれいに仕上げた細長い切石が多く使われており、戦後以降も使われていたものと考えられます（図8）。

それでは、この水路遺構はいつごろ作られ、本来の形はどのようなものであったのでしょうか。そこで、明治ごろに撮影された写真をみると、龍潭側に人の腰ほどの石垣が見え、また水路遺構も部分的に写っています（図9・10）。この写真と水路遺構の龍潭側壁面が石垣であったことが一致しており、この遺構は少なくとも明治ごろ以前の形態を留めていることが分かります。しかしながら、どの時期までに遡るかについては、調査区が狭くその下層まで掘削が困難なこともあります、現時点でははっきり分かっていません。



図3 調査区遠景



図4 調査区全景



図5 水路遺構（上空より）



図6 水路遺構（東から）



図7 龍潭側石垣



図8 機械加工と思われる切石



図9 中城御殿と龍潭（明治ごろ）
〔県立博物館・美術館蔵〕



図10 中城御殿正門より龍潭側をみる（明治ごろ）
〔沖縄県立図書館蔵〕

一方、この水路遺構はいつ埋まったのでしょうか。今回の調査に入る前は、ここは既にアスファルトが敷かれた歩道でした。その歩道の下層にコンクリートの暗渠が現れ、そのコンクリートを外すと水路遺構が出てきました（図11）。このコンクリートの暗渠がいつに作られたかははっきりしませんが、戦後以降から復帰以前のものと思われます。水路遺構を壊さずに、そのまま覆って作られたので、今まで良好に残存していたものと考えられます。

さて、この水路遺構ですが、調査区の西側にはコンクリートに覆われた姿で世持橋の下まで続いているのが見ることが出来ます（図12）。



図11 工事中に発見された水路遺構



図12 世持橋へ続くコンクリート水路

4. おわりに

今回、街路整備工事に伴う発掘調査により、これまでコンクリート暗渠の下に眠っていた石積みの水路遺構を確認する事が出来ました。そして、この遺構は少なくとも明治以前に遡り、琉球王国時代を偲ぶことができるものです。今回、残存状況が非常に良好であったこと、水路の大部分が埋没していたためほとんど知られなかつたこと、そして今後の工事によって遺構の大部分は失われてしまう可能性があることから、皆さんに見ていただきたく現地説明会を開かせていただきました。この説明会により、首里周辺の文化財、琉球王国時代のすがたを考えるきっかけになれば幸いです。

〔参考文献〕

沖縄タイムス社 1983『沖縄大百科事典』

那覇市文化財課 2017『首里当蔵旧水路』那覇市文化財調査報告書第104集

なかぐすくうどうんあと
中城御殿跡

1. 調査の経緯

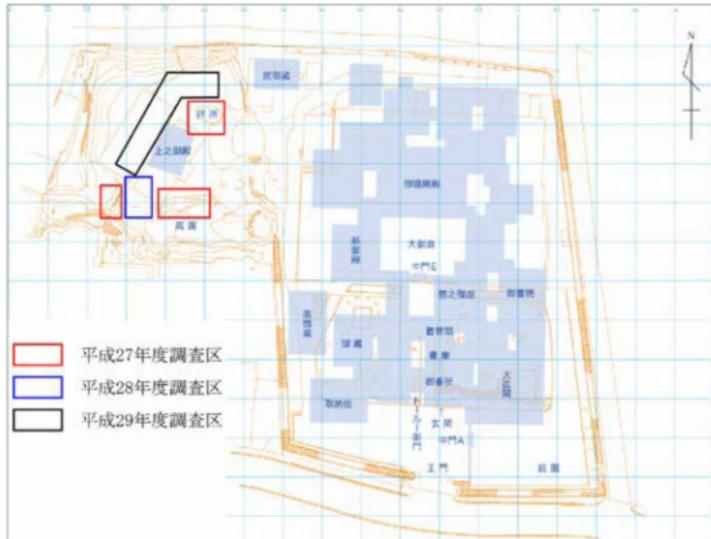
中城御殿跡の発掘調査は、県営首里城公園整備を目的として、平成19（2007）年度より遺構確認調査を実施しています。これまでに側溝や石敷き、石積み、階段、庭園の池などの遺構が確認されています。

平成 27 年度から今年度(平成 29 年度)までは、敷地内北西部の上之御殿と呼ばれる地区を対象に調査を実施しました。

上之御殿地区では、建物と庭園、御嶽などが配置されていたとされます。平成27～28年度の調査では庭園、御嶽、中城御殿の周縁を囲む石牆のあったと考えられる場所に調査区を設置し、遺構を確認するための調査を行いました。その結果、ある程度破壊を受けているものの、庭園跡や御嶽周囲の階段跡、石牆が残っていることがわかっています。今年度は、今までの調査で判明した石牆遺構の残存範囲を確認する目的で調査区を設定し、発掘作業を行っています。



戦前の中城御殿跡全景（米軍撮影）



2. 中城御殿跡とは

中城御殿は、次期国王となる世子の邸宅として、現在の首里高等学校敷地内に創建されましたが、明治3(1870)年に、現在地の大中町に新御殿の造営が開始され、明治8(1875)年に移転します。その後、昭和20(1945)年の沖縄戦により破壊されるまでの間、当地に存在していました。戦後は一時、引揚者たちのバラックが建てられ、のちに首里市役所、首里バス会社の敷地として使用されましたが、昭和40(1965)年に琉球政府により敷地が買い取られ、琉球政府立博物館の建物が新築されました。その後、博物館は平成21(2009)年まで存在していました。



首里市役所当時の中城御殿跡



県立博物館開館当初の様子

中城御殿関連年表

西暦	元号	事項
1621~40	尚豊王代	尚豊王代 中城御殿が現県立首里高校の地に建設される
1870年	尚泰23/明治3年	中城御殿が龍潭北側に新しく造営されることが決まる
1875年	尚泰28/明治8年	世子・中城王子が新築された屋敷に移る
1879年	尚泰32/明治12年	廃藩置県 首里城を明け渡し尚泰王以下中城御殿に移る
1884年	明治17年	中城御殿ほか21ヶ所の敷地・建物など尚泰の私有財産と確定される 3月下旬 宝物を3つの大金庫へ移す
1945年	昭和20年	4月6日頃 中城御殿が米軍の砲撃をあびて炎上
		4月8日頃 火災をのがれた御後絵（肖像画）を御嶽岩の後ろに移す
		4月10日頃 日本軍が殿を機関銃陣地にする（上之御殿、防空壕など）
		戦後 一時引き揚げ者のバラックが建つ
1950年	昭和25年	1月 首里市役所が中城御殿跡に移転する 7月 首里市営バスが営業所を同敷地内に設置する（～66年まで）
1954年	昭和29年	首里市が那覇市に合併され首里市役所が首里支所となる
1965年	昭和40年	琉球政府が敷地購入
1966年	昭和41年	首里支所が当蔵に移転 首里バス（1951年に民営化）が当蔵へ移転 10月 米国の援助により新敷地に鉄筋コンクリート建の新館を建設
1972年	昭和47年	龍潭池畔にあった「琉球政府立博物館」が移転 11月に開館
1991年	平成3年	5月 日本復帰にともない「沖縄県立博物館」と改称する
1992年	平成4年	県立博物館による石牆部分の第1次発掘調査実施
1994年	平成6年	県立博物館による石牆部分の第2次発掘調査実施
2006年	平成18年	県立博物館による石牆部分の第3次発掘調査実施
2007年	平成19年	3月 沖縄県立博物館が新館移転（おもろまち）のため休館
		県立埋蔵文化財センターによる調査開始

3. 調査の成果

i. 御嶽

平成 27 年度の調査時に検出された遺構で、御嶽に登るための階段の根石付近のものと考えられる石積みが検出されています。階段自体は破壊され残っていませんが、戦前に掘られた古写真とほぼ一致する位置に石積みが作られています。



御嶽周辺石積み検出状況（平成 27 年度空撮、南から）



御嶽周辺石積み検出状況（平成 27 年度、南から）

ii. 庭園

石灰岩の岩盤を利用した庭園の前面には池が作られており、これまでの調査で、露出している部分の西側に少し下る位置に続く池が検出されました。また、庭園の上部には方形形状の石組みが検出されていますが、その性格や用途は現在不明です。



庭園検出状況（平成 27 年度空撮、南から）



庭園検出状況（平成 28 年度空撮、北から）

iii. 石牆

上之御殿の西側の壁となる遺構で、南側の庭園に接続し、一部破壊されているものの、北側の淵まで延びる壁が検出されており、地表から 3 ~ 4 m 下まで続きます。北側では石牆に削って垂直に削られた岩盤も検出されており、元の地形を利用して構築していたことがわかります。また、石牆の東側には反対側に面を持つ石列が検出されており、石牆を構成する内側の部分になると考えられます。また、石牆上部には石敷き遺構が残されており、中城御殿当時の地表面であったと考えられます。



石瀬南側部分（平成 27 年度検出、西から）



石瀬北側部分（平成 29 年度検出、西から）



石牆とその内面と考えられる石列（平成 28 年度空撮、南から）



石牆上部の石畳（平成 29 年度、東から）

4.まとめ

平成 27～29 年度の調査では、御獄、庭園、石牆などの上之御殿を構成する遺構を検出することができました。特に石牆部分は中城御殿の構造を考えていく上で重要な遺構であり、石牆下部の当時の地表面に何が構成されていたのか、まだ見つかっていない北側部分も含めて今後も調査を進めていく必要性があると考えられます。今回の調査で発見された遺構は、当時の中城御殿の構造などを把握する上で重要な資料となり、今後、調査とともに遺跡の検討を進め、復元整備のための基礎資料としていく予定です。

次回の催し

平成30年 1/16(火)～2/4(日)

巡回速報展 in 恩納村博物館

平成30年 2/16(金)～2/25(日)

巡回速報展 in 宮古島市総合博物館

平成30年 2/20(火)～5/13(日)

首里城京の内跡出土品展

沖縄県立埋蔵文化財センター 企画展示室

沖縄県立埋蔵文化財センター

TEL: 098-835-8751・8752 〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7 (琉大附属病院向かい)